

柳内たくみ 著

Yanai Takumi



ゲート

GATE

SEASON 2

自衛隊 彼の海にて、斯く戦えり

5.回天編

GATE SEASON 2 5: THE KAITEN

レディ・ フレ・バグ

海に浮かぶ船群
アトランティアの女王。

オデット・ ゼ・ネヴュラ

翼皇種^{アヴィオン}の船守り。
プリメーラの友人。

メイベル・ フーン

神に見捨てられた
巫神。徳島、江田島と
ともに行動する。

石原莞吾

中国人民解放軍総参謀部
二部に雇われた日本人。

シュラ・ノ アーチ

ティナエ海軍の
海佐艦長。
プリメーラの友人。

江田島五郎

海上自衛隊一等海佐。
情報業務群・
特地担当統括官
として調査任務に
あたる。

プリメーラ・ルナ・ アヴィオン

亡国アヴィオン王家の
血を引く姫。

徳島甫

海上自衛隊二等海曹。
江田島統括官付き
として特地の調査任務にあたる。

伊丹耀司

陸上自衛隊一等陸尉。
徳島・江田島と合流し
行動をとにする。

主な登場人物

その他の登場人物

セスラ 妓楼船メトセラ号三美姫の一人。
シャムロック・
ハ・エリクシール ティナエ統領代行。
イスラ・デピノス シャムロックの秘書。
オード・ヴィ ティナエ特命全権大使。
北条宗祇 北条元総理の息子。若手政治家。
カイピリーニャ
・エム・ロイテル ティナエ艦「エイレーン号」艦長。
ドラケド・モビート アヴィオン海海賊七頭目の一人。

特地アルヌス周辺

●ロンドル

帝都●

●イタリカ

◎アルヌス

碧海

グラス半島

エルベ藩王国

トユマレン

クンドラン海

●カナデール諸島

●メギド

アトランティア・ウルース

アヴィオン海

碧海



アヴィオン海周辺



序

日本国の首相官邸総理執務室には、アメリカ合衆国大統領と直接通話できるホットラインが設置されている。

昔は通訳を介した音声での通話しか出来なかったが、高速通信網が利用できるようになった今、モニターに相手の表情を映しながらの会話も当たり前となった。

表情というのは、言葉以上に雄弁だ。感情や思考、弱みや強みといった多くのことがそこに表現される。

もちろん、ベテランの政治家や商人は、表情を取り繕って本心を隠すことに長けている。とりわけ今の合衆国大統領フランクは、政治家にして商人でもあるから、心の内を読み取るには大変苦労する相手だった。

しかしそれでも、よくよく観察すれば僅かな変化から読み取れることもある。日本国内閣総理大

臣の高垣周作は、持ち前の繊細さに——言い換えれば臆病さとも言えるが——磨きをかけることで、それを可能としたのである。

『ニホン政府は、特地に新しい領土を得て、派遣する艦艇や戦力も増やそうとしていると聞いた。シウサク、特地で権益の拡張でも始めるつもりなのかね？』

フランク大統領はモニター越しに高垣の顔を見ると、ニコリと柔和な笑みを浮かべた。

だが高垣の目には、フランクの腹黒い欲望の蛇影がとろろを巻き、「ニホンが新たな市場と資源を獲得したならば、自由競争の市場としてもつばら米国に開放されなければならない。シウサク、イエスと言え！ さあ、さあ、さあ！」と叫んでいる姿が映っていた。

「い、いえ！ 権益の拡大などいつの時代の話でしょうか？ 私どもは帝国側の要望に基づいて等価交換をしただけです」

高垣は英語を解す。しかしながら即答せずに、通訳の字幕表示を待ってから答えた。

『等価交換？ ほほう、シウサクは猫の額ほどの土地と、良質な海底資源を有する島嶼とを交換することを等価と呼ぶのかね？』

「そのように感じるのは我々の価値観だけで物事を見てしまうからです。猫の額と言っても帝国に住まう人々にとっては大切なモニュメント。その価値を例えるならば——そう、イスラエルの人々にとつての『嘆きの壁』と考えるといいかもかもしれません。それに良質な海底資源を得たといってもボーリング調査をした訳ではありません。地下資源においては、前評判こそよかったけれど、実際

に掘ってみたら中身はさっぱりで大損した、というのもよく聞く話です」

高垣は冷や汗を流しながら言い訳した。

その際、フランクに分かりやすい喩えを交げる試みもした。

フランク大統領は家族や側近にユダヤ系を抱える。そのためか以前からイスラエルへの鼻根が過ぎる傾向があるのだ。

しかし反撃の舌鋒を浴びせても、フランクの眉はぴくりとも動かなかった。きっと中東の現状なんてまったく気にしていないからだだろう。

フランク大統領といえば、乱暴な言動で世間に知られている。しかしよくよく見てみると、その発言の裏には冷徹な計算があるのが透けてくる。中東政策については、バランスを取ろうなどと思うとぐらぐら揺れ動いて煩わされる。最初から一方に偏ってしまったほうが、かえって落ち着くとも考えているに違いない。

どうせ中近東ムスリム達からの嫌悪感は、数値にしたら九九九九と既にカンスト状態。これ以上悪くなりようがない。ならば中立を気取って、双方から『味方してくれなかった』と憎まれるよりイスラエルから最上位の好意を得たほうが遙かにマシというのも外交政策としては間違っていない。『なるほどな。だが、ギンザ事件以来、ニホンは羨ましいほどの幸運を得続けているじゃないか。油田の件もきつといい結果を得るさ』

「幸運？」

不注意から発したのだろうが、フランク大統領のこの言葉には、さすがの高垣も湧き上がる不快感を抑えるのに苦労した。銀座事件では、彼の親戚が亡くなっていたからだ。

「フランク。貴方は一連の出来事を幸運と仰った。しかし銀座事件という最大の不幸の埋め合わせには、まだまだ不足しています。我が国にとつても、そして私個人にとつてもね……」

高垣はこれまでに降りかかってきた多くの不幸を、小さな幸運を集めて紡いでどうにか埋め合わせている真っ最中だと返した。幸運を黒字、不幸を赤字とするならば、日本の貸借対照表は未だに真っ赤っかなのだと。

『すまない、言葉選びを間違った。君はあの事件で家族を亡くしていたな……』

「謝罪は不要です。ただ、今回領土となったカナデーラ諸島は、アルヌスから遙か遠くであることをご理解いただきたい。現地は戦国時代とでもいうべき動乱の渦中にあり、タンカーを安全に走らせることも難しい。今回得た資源で利益を上げられるほどの油送が出来るのは、かなり先のことになるでしょう。もし、今すぐにそれをしようとするなら、貴国が中東や世界各地で払っている以上の資金と人材を現地に投入しなければなりません。今の我が国にはそれほどの余力はない」

すると、フランク大統領はフンと鼻を鳴らした。

『それならばよいのだが……』

「一体何を心配なさっているのです？」

『二ホンは大きな市場と有望な資源の双方を手に入れた。そうすると私は不安に駆られるのだ。貴

国がし・面倒くさい国際協調やら我が国との同盟関係に重きを置かなくなってしまうのではないかとね？』

「先代の大統領がそのような態度でらっしゃいましたな。目に見える表向きの平和にこだわって軍勢力を示す手を弛めたばかりに、世界は各地で動乱に包まれた。『戦争は平和主義者が起こす』と言ったのは、確かチャーチルでしたかな？」

『奴の後始末には未だに苦労させられているよ。ノーベル平和賞なんて受けるからこうなった。

「自分はいざとなったら核兵器のボタンを押すかもしれない存在だ。もし賞をくれると言うのなら、任期を無事に終えてからにして欲しい」——そう言って断るべきだったのだ』

「彼はいい人間になったかっただけでしょう。あるいはいい人だと人々から思われたかっただけ」

『それをジェガノフに見透かされたから、酷いことになった。——それでシュウサク、私はまだ答えてもらっていないぞ』

フランクはロシア大統領の名前を出し、溜息交じりに告げた。

「答えとは？」

『言っただろう？ 私は二ホンがこれからどうするつもりなのか気を探っていると。世界の安定を維持するには、我が国の力だけでは不足だ。台頭するチャイナを抑え込み、アジアの秩序を維持するには、経済力一位と三位がともに手を取って協力しなければ。同盟関係とは、いわば長年連れ添った夫婦のようなもの。倦怠期をどう乗り越えるかが重要だ』

「仰る通りです。妻がふとしたことをきっかけに婚姻関係を続けるべきかと悩み始めるなんてことは、洋の東西を問わず起こり得ることですからね。そこに思いを馳せられるということは、大統領ご自身も経験がおりますか？ まさかファーストレディが……」

『いやいや、妻は私に満足してくれているよ』

「それはよかった。是非とも家庭円満の秘訣を教えてください」

『記念日を忘れず、ちゃんと愛の言葉を贈ることだ。それとプレゼントも必要かもしれない』

「おおつ、確かにそれだけのことをしてもらえば、奥様も平和な家庭を揺るがそうとは思わないでしょう。同盟関係もそれと同じです。親密な関係に甘えず相手を思いやって丁寧に接しなければなりません。古き時代の夫婦関係がごとく、相手から奉仕されることを当たり前と考えているようでは見放されてしまうでしょう」

『我が国は長きにわたりニホンを守ってきた。これは長年の奉仕とは考えられないかね？ 君はそれを当たり前だと思い込んでいないかね？』

「残念なことですが、大統領、昨今では、長きにわたって養ってきた守ってきたという我々男の想いは女性には通じません。それらは婚姻関係上当然のことであり、恩恵とはみなされないのです。もしそれを口にしたら、その瞬間に家事労働の対価を給金という形で求められかねません。夫の側としては、これまで住まわせてやった分の家賃と光熱費を求め返すという手もありますが——そのような言い合いを始めてしまったら、もう家庭内は全面的な戦争状態に陥るでしょう。そういった

ことには触れないことが大切です」

『その通りだ』

フランクは微笑んだ。

「とはいえ、大統領がご心配するには及びません。我が国は周辺のバランスを激変させるような国家戦略の変更は予定しておりません。何しろ巨大な隣人がいて、なかなか大人しくしてくれません。あの国は我が国に求めるものがあるようで、今も片手を私どもの内懐深くに突っ込んできています」

『もしかして「彼の地」にかね？』

「現地で起きている戦乱にも一枚噛んでいるようです。おかげでせっかく得られた新領土のカナデー諸島の周辺も、波高しといった有り様です」

『助けが必要かね？ 我が国としては、助力を惜しまないつもりだよ』

当然ながら基地用地と安定的な輸送路の提供が必須となるが、と大統領は続ける。

「ご厚意には感謝いたしますが、特地のほうは我が国の力でもどうにかかります。問題はこれが東シナ海の状態と連動したものに见えることです。貴国が協力してくださるのなら、そちらへの対処にお力添えを願いたい」

東シナ海か——と大統領は嘆息した。

『随分とキナ臭くなってきたとは私も報告を受けている。しかし、そこまでとは考えていなかった

な。ホンコンに集まりつつある抗議運動の漁船団も、軍の動きと連動してるのなら、ニホンとしても何らかのリアクションを起こす必要がある。どうだろう？ 特地に戦力を振り分けるのを控えては。急ぐ必要がないのなら情勢を見定めてからでもよいのでは？」

「いえ、そうも言ってられません。こちらのアナリストの分析では、特地の不安定化は隣国の工作員が指^し差したもののようです。この状況を看^{かん}過^かしては、事態はますます悪化して手が付けられなくなるでしょう。早め早めの手当が必要になるのです」

『そのために東シナ海へ振り分ける戦力が不足してしまった訳か。だから前から言ってたじゃないか。ニホンは軍勢力を増強すべきだと』

「その件では私も頭を悩ませています。少子高齢化が進む日本では、予算を増やしたからと言って簡単に戦力は増えないのです」

『で、君は私に何をどうして欲しいのかね？』

「第七艦隊を、東シナ海に差し向けていただきたい。そうすれば、日米の結束の固さを示すことになり、中国も過激な手段を取ることを躊躇^{ためら}うでしょう」

『君の意向は理解した。では、我が国に何が出来るか、早速ブレーン達と検討する』

すぐに好意的な返事をもらえるとと思っていた高垣は、フランク大統領の態度に眉根を寄せた。

「……」

『我々にも少しばかり時間が必要なのだ。何をどの程度行うか——慎重に検討したい』

「分かりました、大統領。よい返事をお待ちしております」

高垣はフランクと会話を締めくくる挨拶を交わす。そして互いに息を合わせたように、通話終了のアイコンをクリックしたのだった。

アメリカ合衆国／ホワイトハウス大統領執務室

「諸君、我々としてはこの事態にどう対処すべきかね？」

日本国総理大臣との電話会談を終えたフランクは、スタッフ達を見渡した。大統領執務室には首席のオスカーと次席のジェシーら補佐官達、それとマスターソン國務長官、更に統合参謀本部議長のイドリフ將軍らが居並んでいた。

「チャイナの動きは、我々にとって好都合ですわね」

次席補佐官のジェシーが、長い金髪を掻き上げ、才^{さい}氣^{いき}走^はった笑みを浮かべつつその理由を語った。日本は単独では中国に抗^かし得ない。つまりアメリカの要望に——もっぱら貿易に関する交渉の場面のだが——日本が譲歩する必要性が出てくるのだ、と。

「とはいえ無茶な要求をし過ぎると、ニホンをチャイナ側に追いやることになるよ」

調子に乗り気味の次席補佐官に対し、首席補佐官オスカーが警告を発した。

中国の一路政策、ロシアのシベリア開発や北方領土問題といった部分で日本が交渉を進展させるのは、水面下でアメリカが日本に過剰な要求をほめかした時だ。日本とてアメリカにべつたりな存在ではないぞと示してくるのだ。

それだけにあれやこれやと欲をかいてはならず、ほどほどでなければならないというのがオスカの意見だ。

「ええ、分かってますわ」

それでもジェシーは止まらない。得られる利益は、根こそぎ掻き集めるべきだと主張した。

アメリカも選挙で成り立っているからには、政治家は利益を掴み取って国内の企業、ひいては有権者に分け与えなければならぬ。大統領として不動の権力を有している訳ではなく全ては国民の支持があつてこそ。そしてアメリカの民衆は貪欲なのだ。

するとフランク大統領は言った。

「繰り返しになるが、私としては二ホンが特地にかまけるようになって、こちらのことに手を抜くようになるのは避けたいんだ」

どの国も外交では、『利益を独占し、損は他国に押しつけること』を目指す。もちろん実際には不可能だから『出来る限り損を他人に負担させ、利益は可能な限り自分に集中させる』ところで落ち着く。ただその割合や分かち合い方が国によって異なるのだ。

アメリカ合衆国の、そしてフランク大統領の場合はそれが露骨であった。

東アジアの、特に膨張する中国を抑え込む役目は日本に押しつける。そして日本が救いを求めてきたら恩を売りながら助ける。それが基本的態度だ。そうすれば軍事費を削減できるし、日本に武器を大量に買わせることが出来るから国内の軍事産業も大喜びなのだ。

従つて『この状況は好都合』というジェシーの意見には、フランクも賛成であった。

更に言うと、得られる利益は根こそぎ掻き集めるといふ彼女の基本姿勢もまた、フランクの商売人としてのポリシーに合致する。だからこそフランクは彼女を高く評価していた。

「大統領、やり過ぎは禍根を生みます」

ところが首席補佐官のオスカは、それはよくないと言った。

「分かてるよ。チャイナが二ホンと手を組んでしまうと云うんだらう？」

國務長官のマスターソンは、眉根を寄せ、腕を組みながら唸った。

「二ホンとチャイナはいがみ合っているぞ。その両国が手を組むだなんてこと、起こり得るのか？」すると首席と次席の補佐官達が、あり得ます、と揃って頷いた。

一瞬、どっちが説明する？ という目配せが飛び、ジェシーが解説を始める。

「チャイナはイデオロギーなど問題にしておりませんのよ。あの国に大切なものは利益、つまりエネルギーと資源の安定的な供給なのです。二ホンがそれさえ約束できるなら、それまでの諍いすらなかったかのごとく振る舞うことでしょう。そして二ホンは——いえ、二ホンのマスコミは、チャイナの人権問題には無関心です」

オスカーが補足した。

「ニホンは今のところ資源消費国ですが、特地を得てそう遠くない未来には資源輸出国になります。もしチャイナが利益があるとみなせば、ニホンと手を取り合うことは十分考えられるのです」

「そんなことになったら、我々はアジアの権益を一気に失うばかりか安全保障上の危機を迎えてしまうよ」

「だからこそ、対日要求はほどほどに控えねばなりません」

オスカーは言う。拡大膨張する中国を矢面に押し立てて覇権国家アメリカの暴虐を牽制する。それが前世紀八〇年代の日米貿易摩擦でやり込められ続けた日本の対米戦略なのだと。

しかしマスターソンは言った。

「ならばチャイナに具体的な行動を起こさせてはどうかね？ そうなったらニホン国民は怒って、政府がチャイナに接近することを許さなくなるはずだ」

「確かにそうだな。いつそのこと今回は艦隊を出さず、様子見してみようか？」

フランク大統領がそう言っただけで、オスカー首席補佐官が慌てた。

「いけません。あの海域をチャイナに押さえられますと、オキナワとタイワンが危険に陥ります。極東アジア情勢も激変するでしょう。ニホンは簡単には動きませんが、一旦動き出すと極端に走る傾向があり、たちまち憲法改正、チャイナとの本格的な軍事対立、更には勢い余って核武装にまで進んでしまう可能性すら——」

「そうなったら東アジアの緊張が一気に高まってしまう！ ニホンはそこまで踏み込むか？」
マスターソンの問いにオスカーは重々しく頷いた。

「今までなら不可能でした。しかしこれからのニホンならば、ないとも限りません——」

「どうしてだね？」

ジェシーが説明を引き継ぐ。

「もし全面核戦争が起きたとしても、特地を攻撃する手段は、チャイナはおろか全世界のどの核保有国にもないからですわ。ニホンに対しては相互確証破壊が機能しないのです。これはとても危険なことで、チャイナとロシアは時とともに猜疑心を強めていくでしょう」

フランクは呻くように言った。

「確かにそれは問題だな……」

「更にチャイナとロシアの態度を硬化させかねない報告が入りましたわ。ザ・ユニバーシティ・オブ・トキオのプロフェッサーであるヨーメーが、『門』現象の科学的再現に成功しました」

「それが何だと言うのかね、ジェシー？ 異世界に通じる『門』は、今でも必要に応じて開閉されているんじゃないか？ それが今更何の問題になるのかね？」

フランクにはその重要性が今ひとつ理解できないようだ。マスターソンも首を傾げている。

「これまで『門』の存在がさほど問題視されなかったのは、『門』の場所がギンザとアルヌスに限定されていたから。そして実質的に開閉を担っているのが、政府から独立した団体だったからで

すわ」

「そうだ。あの団体はニホンに協力的であつても支配を受けていない。まあ、我々からの支配も受け付けないが、誰に対してもそうならば問題とはなるまい？」

「ところが大統領、これからは違つてくるのです。科学的方法で『門』を再現できるとなつたら、ニホン政府はいつでも自由自在に好きな世界と往来できるようになります。応用の仕方によつては、この世界の任意な場所から任意な場所への瞬間的な移動も可能となりますわ」

「ふむ、保有している航空旅客会社や運輸株を売り払つてしまわなければならんかな？」

「フランクは商売人らしく、まずは物流に大きな変革がもたらされることを想像した。」

「それもあります……」

すると、それまで黙つていた統合参謀本部議長が口を開いた。

「大統領、お気付きになりませんか？ これは弾道ミサイルといった搬送手段を用いず、突如としてクレムリン宮殿やホワイトハウスの大統領執務室に、核爆弾を置いていくことが出来ることを意味しているのです」

オスカーは混ぜつ返すように言った。

「中央銀行の金庫室に繋いで、中の金塊をござり奪い去るなんてことも出来ますね」

核爆弾の喩えよりこちらのほうがフランク大統領には衝撃的だった。

見たことも触つたこともない核爆弾の被害より、空っぽの大金庫のイメージのほうがよほど彼の

感性を刺激したからだ。フランクは商売に失敗して破産した経験がある。誰にも打ち明けたことはないが、従業員に給料を支払う日に金庫が空になつていた夢を見て、叫びながら目を覚ましたことも一度や二度ではない。

「大統領、この技術の完成は危険なのです。非常に、とても、著しく……」

「ましてやニホンが核武装するなんてこと、決して許してはなりませんのよ。『門』技術と、核兵器、そして特地、この組み合わせは最悪なんですの」

二人の補佐官の言葉に、フランクは深々と嘆息した。

「そのプロフェッサー・ヨーマーは、多額の資金と地位で誘えばこちらに靡くのか？ たとえばMIT（マサチューセッツ工科大学）あたりの永年教授職と多額の研究費を約束したら、ヘッドハンティングに応じるか？」

「ヨーマーの人となりについての調査報告によりますと、彼はザ・ユニバーシティ・オブ・トキオの教授職にかなり強い誇りを抱いているようでして——他の地位で勧誘しても、応じることはないだろうとのことだ」

大統領は深く刻まれた額の皺を揉んだ。

「つたく、金に靡かない奴つてのはこれだから困る。とはいえ、誘拐したり暗殺したりで解決……ともいかなのだろ？」

「ヨーマーがいなくなれば、研究の進展は多少なりとも遅れるでしょう。しかし一度実験に成功し

たからには研究が止まることは決してありません。遅かれ早かれ、実現に向かつていきます」

「うーむ」

オスカー首席補佐官が右手を挙げ、常識的な手法を提案した。

「『門』の危険性を国際問題として提起して、研究を禁止する国際条約を締結するという方法がありますか？」

「いや。『門』研究の問題は公にしたくない。いくら条約で禁止しても、陰で研究を進める国がいる以上、どうにもならん」

実際、ヒトの遺伝子改造を例に挙げると、国際的なルールが設けられ、安易な実験は禁じられている。しかし中国の研究者は、ヒト遺伝子に手を加えた双子の女児を誕生させてしまった。当然、全世界の研究者達から猛烈に叩かれ、中国政府も慌てて処罰したと公表したが、その後どうなったかの情報は完全に隠蔽されてまったく伝わってこない。

中国には、やれることをやって何が悪いという考え方があからだろう。法が禁じていても隠せばよく、たとえバレてもしらはつくればよいという態度だ。従って国際法で禁じても陰で研究が進められるのは間違いない。それどころか、禁止すべきだという提案をきっかけに研究を開始しかねない。

対抗するには、アメリカも研究を進めるしかなくなるのだ。

もちろん、アメリカや欧州各国にも、こうした非合法・反倫理的な実験を行う地下組織は存在し

ている。だが、表向きは取り締まらねばならない以上、予算的にも活動的にも規模を抑えざるを得ない。堂々と公費を投入できる中国のほうが圧倒的に有利なのだ。

「熾烈な研究合戦が始まってしましますわね」

結局、アメリカも莫大な予算と人員を投じなければならなくなる。しかも、この技術が完成した後によってくる世界は大混乱だ。もしかしたらその先には人類にとってバラ色の世界が訪れるかもしれないが、変革期は悲劇的かつ非人道的な事態に陥るだろう。

「致し方ない……今回の件と合わせて対処することにしよう」

フランク大統領は重々しく言った。

「どういうことですか？」

「オスカーとジェシーは、今回のチャイナの動きを利用して二ホン政府とチャイナとの間に決定的な楔を打ち込むことになるようなプランを考えてくれたまえ。ついでに、このヨーマーの件と一緒に解決できるとなおいな。根本的な解決でなくていい。必要なのは、ある程度の時間稼ぎだ」

「そんな都合のよい方法があるでしょうか？」

マスターソン國務長官が首を傾げた。

「大丈夫だ。この手のことは、二人の特技だからな。違うかね？」

フランクの無茶ぶりとも言える要求に、オスカーは一瞬息を呑む。

だが、ジェシーは躊躇うことなく前に出た。

「大統領、是非私にやらせてください。外連味溢れる良策をご用意いたしますわ」
「ふむ。三日以内に構想を提出してくれたまえ。それを読んでから、各部署に詳細なプランを検討させる」

「かしこまりました」

ジェシーが颯爽と退出していく。少し遅れて、オスカーも彼女を追うように執務室から出ていったのだった。

01

特別地域／碧海／カナデーラ諸島

南洋の島を形作る風景といえば、強い日差しと白い砂浜、そしてエメラルド色に輝く海だろう。椰子の木と、赤茶けた土も忘れてはいけない。

そんな色彩からなるカナデーラ諸島には、ラワン、マーレット、オルロットの三つの島と、名も

なき小さな岩礁の群れがあった。

この島嶼を領有していたのは、大陸の沿岸国の一つゲイキール子爵家。大陸で覇を唱える帝国に服属する諸侯家だ。

記録では、カナデーラ諸島には住民がいなかったことになっている。しかし人間の姿がまったく見られない訳ではない。海羊や海猪といった家畜の群れを率いた海洋遊牧民の集団が、アウトリガー付きのカヤックでやってきて、一時的な住み処にすることもあったのだ。

だが、ゲイキール子爵家は、彼らのことに注意を払ったことはない。この島にそれほどの利用価値を見出していないからだ。先祖代々、引き継いできた自国の領土目録にその名がある。故に領有を続けてきたに過ぎない。

だからだろう、その島が今どうなっているか気に留めることもなく、宗主国たる帝国の女帝から、求められるまま領有権を差し出した。

対価として彼が得たのは、伯爵への陞爵だった。帝国宮廷儀礼における序列が、「子」から「伯」へと上昇したことはゲイキール家にとって最高の栄誉なのだ。

そして、海洋遊牧民達もそのことにはまったく無関心、無関係を決め込んでいた。彼らはこの島の主が誰かなんて気にしたことがないのだ。

海洋遊牧民の生活は自由気まま、単純明快だ。

彼らは朝起きると、網を開いて家畜の群れを解き放つ。そして海羊達がエサとなる魚を食べるの

を、カヤックを操りながら見守るのだ。

眠くなったら木陰の涼しい所に横たわって眠る。

発情したら適当によい相手を見つけてまぐわい、子を産む。

そして家畜のエサとなる魚が減ったら、また別の海へと移動するため、カヤックに海羊の皮で作った帆を張って島から出るのである。

実に分かりやすい。彼らはそんな牧歌的な毎日の中で生まれ、育ち、死んでいくのだ。

ワコナというヒト種の少女と、ウギという海棲種族トリトーの少年が出会ったのもそんな分かりやすい生活があったからだろう。

強い日差しで褐色に焼けた肌を持つワコナと極彩色のウギは、出会ってすぐに意気投合し和気藹々と笑い合って、時々つき合うように喧嘩した。

そうした光景を周囲の大人達は特段の感慨を抱くこともなく、当たり前の日常として眺めていた。だがそんな平和も、水平線近くに帆船の群れが姿を見せたことで破られた。

「何だろう？ ワコナ、あれを見て！」

ワコナが膝まで浸かる浜辺で鉈もろを手に魚を狙っていた時、海面から顔だけ出していたウギが声を上げた。

一番近くまでやってきたのは、ラティーンセイルを張った帆柱を三本立てた船だ。

櫓かいまで有した船の型は、ジーベックと呼ばれる戦闘艦であった。そんな船が何十隻も浮かんでい

たのである。

それらの船は帆を下ろすと、短艇なんていを何艘も海面に下ろそうとしていた。

舷側げんぞうの縄梯子をつたって、剣や弓で武装した海兵が乗り移っていく。

それを見たワコナは、胸の奥から湧き上がるざわめきに戸惑った。これまで帆船と出合うなんてことはいくらでもあった。セーリングカヤックで海羊の群れを追っている時に、すれ違って互いに手を振り合うこともあった。海羊の肉が欲しいと頼まれ、鉈や斧といった金属製の道具と引き換えにいくらか渡したことだってある。

なのに今回はどうしてこんなに落ち着かない気分になるのか？

それはきっとこれまでの連中が、ワコナ達に関心を持つことなどなかったからだ。なのに今回に限っては、自分達に向かって近付いてくるのだ。大人数で。鉄の武器で身を固めて。

「あれは海賊だ！ 海賊の人狩りだよ、ワコナ！」

ウギが叫んだ。

「海賊!？」

「そうだ、奴らだ！ 最近の海賊は人間を捕まえるんだ！」

ウギはその光景を大陸の漁村で見かけたことがあると呟いた。

海賊達は少しでも魔導の力を持っている者をパウビーノとするべく、人間を見かけると手当たり次第に捕らえ無理矢理掠さらっていったと言う。

「大変！ みんなに報せなきゃ！」

「分かつてる。ワコナ、こっちだ！」

ウギはワコナの手を取ると、水を蹴って走った。

ウギとワコナの報せを聞き、島の人々は海を振り返る。

「みんな逃げろ！」

「でも、どこへ！」

その時には既に短艇の群れは砂浜にまで近付いてきていた。それを見て、みんな我先にと走り出した。

程なくしてラワン島のおちこちで悲鳴が上がった。

短艇を砂浜にまで乗せた海賊達は、剣を抜いて散開すると島に住む人々に襲いかかったのだ。

怒号と喚声の中で剣刃が閃き、血臭に満ちた飛沫が舞い上がり白い砂浜に鮮紅色の彩りが加わる。

矢が空気を切り裂いて飛び、逃げ惑う人々の背中に突き刺さった。

おちこちで絹を裂くような声や、絶命の苦悶の声が上がる。

「若い女、男、子供は捕らえろ！ 年寄りはおつ殺せ！」

上陸した海賊達の指揮官が叫ぶ。

殺されずに済んだ者は捕らえられ、手足を数珠繋ぎに拘束されて集められていった。

海賊達はこの島で暮らしていた海洋遊牧民に目を付けたらしい。

島には粗末な小屋がある。椰子の葉を屋根にした数時間の労働で作れるような小屋だ。海賊達はそのような小屋も誰か隠れていないかと捜し始めた。

ワコナ達は貝が内包している真珠や、子供が拾って宝物にしそうな宝貝や、儂げな美しさを控えるに主張する桜貝を集めて身を飾る習慣がある。もちろん加工に手間はかけない。自然そのままのそれらに小さな穴を開けヒモを通すくらいだ。それらで男も女も裸の身を飾るのだ。

海賊達はそんなものですら奪った。

「ちっ、しけた島だぜ。こんなものしかないぜ」

「海の生け簀には海羊がいっぱいいますぜ」

「よし、お前達、網を手繰って片っ端から捕まえろ！」

そしてあらかたの物を奪うと、海賊は家屋に火をかけた。青い空と白い雲を背景に、黒い煙が立ち上っていった。

略奪騒ぎもどうにか落ち着いて頃、沖の船から一艘の短艇がやってきた。

波に揺られる短艇には、パリッとした仕立ての艦長服を纏った若い男が背筋をピンと伸ばした姿で乗っていた。

男の名はトラッカー海佐。

トラッカーは短艇が砂浜に乗るのを待ってられないとばかりに、波打ち際で靴が濡れるのも厭

わず浜に降り立った。

「ちっ、くそっ……」

その瞬間トラッカーは舌打ちした。

透き通った海面から白い砂がよく見える。今、海に降りても浸かるのはせいぜい踝くらいだろうと思ったのだ。しかし意外にも足首から臍の中ほどまで沈んでしまい、半長靴に海水が侵入を始めた。砂の柔らかさを見誤ったのだ。

だがすぐに気を取り直して意識を島へと向ける。

砂浜には住民達が捕虜として集められていた。

「ふんっ……よくぞまあこんな仕事に熱心になれるもんだ」

白い砂浜を踏みしめて上陸するトラッカーの呟きに、翼人少女の船守りイザベッラが答える。

「しょーがないじゃん。奴隷だって売れば金になるもの。こんな何の旨味もない仕事でタンマリ稼ごうと思ったら、奴隷狩りしかないでしょう？」

アトランティア・ウルースは海上生活者が群れることによって形成された集団だ。

彼らの多くは海賊稼業に手を染めた経験がある。他人の物を奪うことを悪いとは思わないのだ。その集団が時を経て大きくなり、今では国家を標榜するようになった。

野卑な海賊気質のままでは外国からの評判がとても悪いと理解すると、一生懸命お行儀をよくして尊敬されるよう身繕いを始めた。しかし元が元だけになかなか改められない。様々な場面で、海

賊であつた時の名残を見せてしまう。

「艦長！」

陸に上がっていた海兵達の代表がトラッカーの姿を認めてやってきた。

「報告いたします。島を占領しました。島にいた奴らも全員捕らえ終わりました」

「一人も逃がしてないだろうな？」

「大丈夫です。全員です」

トラッカーは砂浜に集められたこの島の住民らしき群れへと目をやった。

捕らえられた住人達は座らされて項垂れている。中には恨めしそうな目をトラッカーに向ける者もあった。

浜や内陸に視線を向けると砂浜のあちこちには死体が散らばっていた。見ると年寄りが多い。若い男女の遺骸も見られたがきつと激しい抵抗をしたのだろう。

「必要以上に痛めつけてないだろうな？ 不必要な怪我をさせてたりしたら、お前らを同じ目に遭わせるぞ！」

「大丈夫です。これから奴らを働かせにやなりませんし、亜人だろうがヒト種だろうが、若くて活きがよければ高く売れるってことはみんな弁えてますので」

そういう意味じゃないんだが、と言いかけてトラッカーは止めた。

自分の感性がアトランティアの、特に兵士達に共感してもらえないようなものではないと分かつて

いたし、結果的に捕虜を苦しめないように扱うならそれで構わないからだ。

「おい、この臭いは何だ？」

トラッカーはクンクンと鼻を鳴らす。煙の臭いに肉の焦げる臭いが混じっていた。

「きつと家に隠れている奴でもいたんでしょ？」

それに気が付かず家に火を放つたらしい。水兵達が火を消そうと慌てているが完全に火に包まれてしまっただけでは間に合うはずもない。

「ちっ、しょうがねえなあ……」

トラッカーは捕虜達の集まるところまで進むと、顎をしゃくつて部下達に命じた。

「儀式の準備をしろ！」

「はっ！」

トラッカーの部下達は、長い旗竿を砂浜の中央に据えた。

「女王レディ・フレ・バグ陛下の命により、本日、この瞬間より、カナデーラ諸島はアトランティア・ウルースの神聖不可侵な領土として編入された！」

トラッカーの宣言と同時に、号笛が吹き鳴らされる。

「国旗に敬礼」

兵士達が整列して見守る中、アトランティアの国旗が旗竿のてっぺんに向かって昇っていく。そして昇りきると、トラッカーは敬礼を解いて部下達に告げた。

「よし、全てが終わったことを艦隊の提督にご報告せよ。爾後、この島嶼は我がアトランティア海軍近衛艦隊が泊地として使用する。陸戦隊長は捕虜を役し、早急に要塞の建設を始める！我々は艦に戻る」

こうしてトラッカーの率いる艦は、アトランティア・ウルースの版図を広げる尖兵たる任務を終えたのであった。

「奴ら、行った？」

「ううん、ここに居座る気みたい」

岩陰に隠れて皆の様子を見ていたウギは、自分が間違っていたことを悟った。

「くそっ」

来寇したのは海賊ではなかった。正しくはアトランティア・ウルース軍であったのだ。

しかしそんなことは些細な間違いであって大差はない。海賊であろうとアトランティアの兵士であろうと、この島の平和を破壊し、人々を塗炭の苦しみが待ち受ける奴隷生活へと引きずり込もうとしているのは同じなのだから。

見れば、島に残って捕虜となった人々を無理矢理働かせて何かの建設を始めた。抵抗する者がいたのか、鞭や棒で激しく打ち据えている。

「と、父さんと母さんが……。わたし、みんなを助きたい……」

ワコナが泣き始めた。

「とにかく逃げよう。おっさんと子供達を安全なところに逃がさないと……」

ウギとワコナは、幼い子供三人と髭面の初老男性を一人連れていた。両親や親戚から自分達が囷になるから逃がしてくれと託されたのだ。

初老の男性は、船材に掴まって漂流しているところをウギが助けた。海で死にかかっている者を助けるのは海で生きる者の習慣なのだ。

とはいえ、それは純粹な善意からの行動ではない。メギド島の例にもあるように、助け出された人間の何人かに一人は、助けられたことに恩義を感じて一族に繁栄をもたらしてくれることがある。彼らの行動はそれを期待してのもの。つまり打算なのだ。

とはいえ全部が全部打算という訳でもなかったりする。

でなければ、自分達を囷にしてまで初老男性や子供達を逃がそうとするはずがない。

彼らは海賊達の狙いが自分達の身柄にあると理解すると、盛大に逃げ回って海賊の耳目を引き寄せた。そんなことが打算だけで出来るはずがない。要するに、打算を名目にした海で生きる者の心意気のようなものだ。

そしてそんな心意気を託された以上、ウギとワコナは無謀な行動に出る訳にはいかない。

ワコナは島の岬に隠してあったアウトリガー付きのカヤックを引っ張り出す。

そしてそれに老人と子供達を次々と乗せ、アトランティアの船が屯する方角とは逆方向に漕ぎ出

していったのである。

アトランティア・ウルース

アトランティア海軍近衛艦隊、トラッカー海佐艦長率いるジーベック級軍用帆船イザベツラ号は、大小様々な船舶を連ねて海上都市を形成しているアトランティア・ウルースへと帰還、未明の入港を果たした。

しかし舳い綱を繋いだからといって一息つくことは出来ない。

舷梯を渡すと、早速労働力にならない捕虜達を船底から引っ張り出して奴隷商人に引き渡さなければならぬし、消耗した水や生鮮食料品を積み込む作業も始めないといけない。海羊の肉も塩漬け加工を施したり売り払ってしまったりする必要がある。

そしてそれらと並行し、アトランティア・ウルースの版図に新たな島嶼を加えたことを報告するため、伝令使を王城船へと向かわせる必要があるのだ。

「では、行け」

「はっ、お任せください！」

トラッカーの伝令使として艦長室を飛び出していったのは、見習い士官のカシュ・ノ・フラン

ジェリコであった。少年期から青年期へと移り変わる年頃のカシュは、任された仕事を果たすため足取りも軽く艦長室から出て行った。

「カシュの奴を王城船に行かせたの？」

船守りのイザベッラがカシュと入れ違うようにして艦長室を覗き込み、一、二、三の必要事項を報告した後の余談という形で尋ねてきた。

「ああ、目をかけてやってくれと頼まれてるんだ」

「それって宰相閣下の口利き？」

「ま、そういうことだ」

作戦成功の報告を王城へともたらず伝令使は、提督や大提督の目に留まりやすい。報せの種類によつては女王直々に声を掛けられることすらある。将来の栄達を夢見る若手にとつては垂涎の役目なのだ。

「大人の世界って大変だね」

プリメーラ・ルナ・アヴィオンを女王に推戴して再興を目指すアヴィオン王国。その宰相に、女王直々の使命を受けたイシハ・ラ・カンゴは、アトランティア・ウルースの女王レディ陛下からも宰相に任じられ、アトランティアの宰相も兼ねることになった。するとその周囲には、宰相の権勢の恩恵に浴そくと、大臣、貴族、有力者達が次々と群がっている。

イシハは彼らの願いを聞き入れる交換条件として、自分の願い事を叶えてもらったり、美酒美食

の宴に招待してもらったり、財貨や宝物、美女の奴隷などを贈ってもらったりしている。有り体に言えば、職権を乱用し、私腹を肥やす汚職まみれな毎日を送っているのだ。

とはいえ、これがこのアトランティアの――否、特地世界の政治の日常でもあった。

力なき者は、財貨や宝石、あるいはその他の別な何かを差し出し（差し出すものがなければ、自分の身や働きを対価とし）、力のある者の庇護下に入つて寄子となる。力ある者は寄親として彼らを護るのだ。

もし外部勢力と対立したり利益を争う事態となった時は、寄親同士で利害調節をしたり、それが出来ないような時は戦ったりする。もちろん寄子はその戦いに参加する。

何だか武士のご恩と奉公、あるいはヤクザの親分子分兄貴舎弟、西洋騎士の君臣関係みたく見えるがその通りだ。洋の東西、時代、世界を問うことなく、似たような関係が形成されるなら、それは知的生命体を作り上げる社会の形態における「基本」なのだろう。

そうしてイシハは、アトランティアの宰相となったことで巨万の富を築くことに成功した。

ただし同時に、縋ってきた寄子の頼み事も一杯抱え込むことになった。その中には、『今度、軍に入ることになった我が息子をよろしく引き立ててやってください』というものもあり、それが巡り巡ってトラッカーの元へとやってきたのだ。

というのも、トラッカーを近衛艦隊の艦長職に引き立てたのは宰相のイシハだからである。トラッカーは寄子としてイシハの意向を叶えてやらねばならない。

今回、見習い士官に伝令使の役目を与えたのもそれが理由だ。イシハから送り込まれた見習い士官が女王陛下の前に立つ姿を示すことで、トラッカーはイシハからの頼みをしっかりと叶えているぞと示すことになり、イシハもまた取り巻きとなった有力者に顔を立てることが出来るのだ。

とはいえ、三人の見習い士官の中で誰を選ぶかはトラッカーの自由だ。

「カシユの奴、とっても嬉しそうな顔をしてたよ。自分が選ばれるとは思ってなかったみたい」

「奴は、自分を能なしだと弁えているからな」

「能なしは酷いよ。親の七光りを盾に威張ったり責任逃れをしたり、楽をしたがるあの凸凹コンビよりはよっぽどマシだし」

「ああ、確かにそうだな。奴は意欲があるだけマシなほうだ」

イザベッラ号には、士官見習いの若者が三人乗り込んでいる。だが三人は経験もなければ、役に立つような知識も持っていない。それで艦長のトラッカーの役に立とうと思ったら、彼らに出来ることは意欲に溢れていることを示すか、付け届けをしてトラッカーの財布を温かくすることくらいだ。

そして、コネでこの世界に入ってくるような連中は、熱意を示すより親の財力に頼って付け届けをして、楽な仕事を割り振ってもらって見習い期間を通り過ぎようとする。

もちろん、トラッカーとしてはくれるという物を断ったりはしない。そして貰ったからにはちゃんと楽で責任の少ない仕事を割り振ってやる。とはいえ、トラッカーも自分の船を沈めたり、ドジ

をやったりして自分の評価を低下させたくはない。下から吸い上げた付け届けを、そのままに差し出し自分の評価を上げるという方法もあることにはあるが、それでは格好が付かないのだ。

トラッカーも軍人であるからには、能力で評価されたいという矜持がある。だから部下にも資金だけでなく能力を差し出すよう求めている。それすら出来ないような無能者は、せめて意欲だけでも見せよと求めた。するとカシユは、たまたまなのか、あるいは必然か、付け届けではなく熱意を示すことを選んだのである。

カシユは皆が嫌がる仕事を率先して引き受けた。号令でドジリ、信号で失敗して皆から嘲笑され、水兵達から馬鹿にされつつも、しかし確実に経験と知識と力量を向上させていった。

だからこそトラッカーは、カシユを伝令使に選んだのだ。

もし、見習い士官の中からいきなり士官に出世させられる梓が二人分できたとしたら、トラッカーはそれを凸凹コンビに与え、カシユは見習いのまま手元に残すだろう。カシユにとってそれは不幸なことかもしれないが、トラッカーにとって、そしてこの船の乗組員達にとってはそれこそが幸いなのだ。

「でも、このことを知ったら、凸凹が妬くんじゃない？」

「別に気にする必要はないさ。俺は日頃から能力や意欲を、付け届けと同等に評価すると言ってるからな。知ってるか？ 金って代物も、量が増えると価値が下がるんだぜ」

「みんなが楽しかったって賄賂を差し出してるような時は、一生懸命働いてくれるほうが価値があ

るってことだね？」

「そういうこと。俺に差し出せるものが他の奴よりも少ないと思ったら、付け届け額を他の奴より多くするか、意欲的に振る舞うかすればいい。俺は艦長としてこの船のことに責任があるからな。多少の銭金なんかより意欲的なほうがありがたかったってことさ」

トラッカーはそう言って笑った。

「面白いよ、あんた。悪名高い宰相様の口利きで艦長になったって聞いたからさ、一体どれほどの銭ゲバ野郎かと思ってたんだけど、あんた、なかなか悪くないよ」

イザベッラは気に入ったと言いながら、相好を崩したのだった。

さて――

イザベッラ号に配属された士官候補生カシュ・ノ・フランジェリコは、艦長室を出ると足早に船から降りた。

「おい、カシュ！ どこに行くんだよ？」

埠頭で商人と価格交渉をしている士官に同行していた件の凸凹コンビ――見習い士官のデブとのつぽことバヤンとレグルスの二人は、カシュの姿を目敏く見つけると声を掛けてきた。

この二人はカシュの見習い仲間ではあるが、決して仲がよいとは言えない関係だ。

「艦長から伝令使を言い付かったんだ！ ちょっと出掛けてくる」

「何でお前が？」

「たまたま二人が忙しかったからだろ！」

カシュは二人の追及を軽く手を振って誤魔化すと、そのままその場から離れた。

正直、理由を問われても彼には答えられないからでもあった。

カシュは万事に要領が悪く、艦長への付け届けすら満足に出来ていない。それがために当直なら夜間ばかり、仕事もキツくて汚くて疲れるものばかり割り当てられてきた。ドジも失敗も多く、周囲に迷惑をかけがちで艦長の覚えがめでたいとは言えないのだ。

それだけに、そんな自分が名誉ある伝令使に任ぜられるとは思ってもみなかった。しかしこうなったからにはちゃんと務めて艦長の信頼に応えねばならない。

「おい、カシュ！」

だがその時である。バヤンとレグルスが追いついてきた。

「何だ二人とも、売買の立ち会いはいいのかい？」

「なあカシュ、艦長から言い付かったそのお遣い役、俺達が代わってやってもいいぞ」

レグルスは足早に進むカシュに追いつくと肩に腕を回した。

細身で長身のレグルスは、カシュより頭一つ高いから肩に腕を回されると上から圧迫される感じになる。

「ダメだよ。艦長は僕にとって……」

「いいからいいから！」

カシユがレグルスの腕を払いのける。するとバヤンがカシユを横から突き飛ばした。

「うわうわっ！」

アトランティア・ウルースは大小様々な船が寄り集まって出来た水上都市だ。

目的とする船に向かうには甲板^{かばん}上の狭い通路を通り、船と船とを繋ぐ舷梯^{げんたい}を渡らねばならない。そんな場所で不意に横から押されたら、足を踏み外して海に落ちてしまう。

たちまち海面に水柱が上がった。

しばらくして海面に浮かび上がってきたカシユを見下ろしながら、レグルスとバヤンは言った。

「おや、困ったね、我が同輩よ！ そんなびしょびしょな姿では、王城にはとても行けないよな！？」

その姿で女王^{ハラム}の前に出たら失礼だ」

「しょうがない。お前に代わって俺達が王城船に行ってきたてやる」

二人のあまりな言いように、カシユは懸命に立ち泳ぎしながら言い放った。

「酷いぞ、レグルス！ バヤン！」

「礼なんていらないうぞ。これも同僚のよしみだ。後のことは俺達に任せてくれ！」

「そんな!？」

「早く上がれ。風邪引くなよ！」

「待ってよ！　せめて縄梯子を下ろして！」

だが二人は、カシユを海から助けようともせずに行ってしまったのである。

* *

妓楼船^{ぎろうせん}の朝は遅い。

何しろ妓楼の稼ぎ時は『夜』だ。娼姫との一夜限りの恋を楽しんだ泊まり客は、朝になって寝ぼけ眼を擦って疲労で萎^なえた足腰を引きずるようにして家路に就くのだ。

おかげで娼姫や従業員達の生活リズムは昼夜逆転——とまではいかなくとも、大幅にずれ込んでしまう。

しかし、である。日本国海上自衛隊二等海曹の徳島甫^{とくしまはづめ}は、まだ誰も起きてこない朝の暗い頃から厨房に入り、料理の支度を始めていた。

何のためかと言うと、泊まり客の朝食を作るため。『握り寿司』を出して欲しいという要望に応えるためでもある。

「握り寿司が流行るなんて思いませんでしたね……」

徳島が飯台の酢飯をしゃもじで切りながら呟く。

すると徳島の後ろで大釜の火加減を見ていた江田島五郎^{えだじまごろう}一等海佐が言った。

「いえ、私はこうなってもおかしくないと思ってましたよ。アトランティアの人々の嗜好^{しこう}はどこか

日本人に似ていますし」

海上生活を送るアトランテアの人々は、オリザルという海藻由来の米に似た穀物を、魚のエサなどと蔑^{あやす}まずに普通に食べるのだ。

そして新鮮ならば、魚介類を生で食べることもある。

醤油の代用として使える豆^{トウモロコシ}醤（魚醤を作る際、魚と同量の豆を混ぜたもの）というものも存在する。

更にわさびに似た香草エウトリが大陸にはあったりする。

ならば酢や酒、糖蜜の類を混ぜて、炊いたオリザルにまぶして酢飯とし、すったわ^{エウトリ}さびと程よい厚さに切った刺身を載せて、豆醤を付けて食べる握り寿司へと至るのも時間の問題と言えた。

つまり徳島が持ち込まなかったとしても、いずれは誰かが発明したはずなのだ。

しかし、とはいえ、まだ存在していなかった。

握り寿司を受け入れる土壌は出来つつあったのにまだ存在していない。誰かが天啓を得るのを待つだけの状況であつたのだ。

「そんなタイミングに徳島君が握り寿司を持ち込みました。しかも自然発生したものに付随する欠点も、我が国で数百年の時をかけた試行錯誤によってオミットされて完成形に至ってます。新しい宰相に気に入られたという物語性の後押しもあります——その味こそがこの世界の人々を魅了したのですよ」

徳島がこの妓楼船メトセラ号で握り寿司を作ったのは、アヴィオン王国の宰相となった日本人、石原莞^{いはらかんこ}吾を持て成すためであつた。

特^{とく}地に長くいるという石原は故郷の味に餓^うえているに違いないと、手に入る食材を使つて心を込めて握つたのだ。

もちろん石原は、久しぶりの日本の味に喜んだ。徳島は美味^{たま}い美味いと言いながら寿司を食べる石原の姿に、料理人として深い喜びと満足感を得たのである。

だがその時、石原の傍らでお酌をしていた娼^ま姫の一人が首を傾げた。

「宰相様、生の魚がそんなに美味しいのかニヤ？」

その時、石原はツンと鼻に利くわさびのせいか、はたまた故郷への郷愁がそうさせたのか、目を潤^{うる}ませていた。

娼^ま姫達の多くは貧困家庭出身だ。燃料となる薪を節約しなければならず生の魚を泣く泣く食べた記憶がある。酷い底辺生活の記憶だけに、懐かしさは覚えても、泣くほど美味いという印象はない。それ故、時の宰相が美味い美味いと頬張る「ニギリズシ」への興味が込み上げてきたのである。

「宰相様、うちらも、食べていい？」

「ああ、いいぞ、お前達も食べる。食べてみるー」

女性が一口で放り込めるサイズだったことも幸いして、娼^ま姫達は頬張つた。そして目を白黒させた。

シャリのほんのりとした温かさ、刺身が口の中でほろほろと崩れる食感、魚肉と脂、そして豆醬の旨味がじわっと舌の上に広がっていく。

酢飯の爽やかな酸っぱさと、僅かながらの甘さでコーティングされたオリザル一粒一粒が、魚の旨味と渾然一体となっていた。

「あっ……」

そして不意打ちのように、ツンというわさびの刺激が鼻を駆け抜ける。

「どうだ、美味いだろう？」

石原は意地悪そうにキシシと笑みながら娼姫達に尋ねた。

「くうう」

涙目になった娼姫の一人は、返事代わりに石原の肩をベシベシ叩く。

わさびのことをあえて警告しなかった石原への可愛らしい復讐だ。しかし同時に、みんな次の寿司に手を伸ばしていた。要するにこの新しい味が気に入ったのだ。

以来、娼姫達は「うちらのお客にも、この料理を知って欲しいからニギリズシを出して」と徳島に求めた。客を理由にしているが、要は自分達が食べたいだけだ。とはいえ娼姫達が美味しい美味しいと言って食べれば、客だって「では、試してみよう」と思う。そして実食してみれば美味いとが分かる。

こうして徳島の作った握り寿司の評判は瞬く間にアトランティア中に広まったのだ。

この時、娼楼船メトセラ号の料理は、既にアトランティアで一番の声望せいぼうを獲得していた。しかしそれは二位や三位が追隨する余地のあるものだった。だが新しい流行、食文化の一つを開拓してみせたことがダメ押しとなった。

娼楼船メトセラ号は序列から離れた格別の存在、アトランティアの食文化発信の中核であり推進役と見做みなされることになったのである。

「ただいま！ 戻ったよ」

ご飯が炊けましたよ、と江田島が竈かまどから鍋を下ろした頃、シュラ・ノ・アーチとオデット・ゼ・ネヴュラの二人が戻ってきた。

「戻ったのだー」

振り返ると、二人ともこのアトランティア・ウルースに入国した時の変装——シュラは眼帯を外して男装し、オデットは本来真っ白なはずの羽毛を極彩色に染めた姿だ。

二人ともアトランティアから賞金付きで手配されているから、ここにいる限りは偽名と変装が欠かせないのだ。

見れば二人の手には籠があり、朝の市場で購あがなってきた魚が山ほど入っていた。

「おおつ、ありがとう」

徳島は早速シュラの籠の中身を検あためた。

シユラはこの碧海^{へきかい}の魚については、徳島以上の目利きだ。だから徳島はこの二人に魚の仕入れを任せていた。そのため二人は朝も早く、日も出ないうちから起き出しては漁港へ魚を仕入れに向かっていた。

「おおつ、さすが生きのいい魚ばかり。血抜きもよく出来てる。では早速！」

徳島はすぐに魚をまな板に寝かせると、素早く三枚に下ろしていった。

刺身も牛肉などと同じく、ある程度熟成させたほうが旨味が出る。しかし大型冷蔵庫も氷も手に入らない特地の南洋で魚を生で食べるなら、その日に獲れたばかりのものを朝方の涼しい時間帯に料理してしまうほうが安全なのだ。

そんな徳島の見事な包丁捌きを眺めているシユラ達に江田島が尋ねた。

「で、どうでした？」

するとシユラよりも早く、オデットが唇を尖らせ不満そうにまくし立てた。

「他の店の料理人が市場に一杯来ていたのだ！」

「ダラリア号のパススムまでいたのが見えたよ」

徳島がこの海上都市に持ち込んだ握り寿司は今、アトランティアで大流行している。

「俺、食べてきたぜ」という者がいれば誰もが自慢話を聞きたがり、「ニギリズシって何?」「是非一度食べてみたい」と興味を持った。

だがメトセラ号は高級妓楼だ。日々の糧を得るだけで精一杯の労働者には近寄りがない。そもそ

も女子供には無縁な場所とも言える。そのため「美味しい」「凄い」という噂を羨むばかりで、実際には食べられないという状況が続いたのだ。

すると、あちこちの飲食店や居酒屋の料理人達が真似を始めた。

そんなことが出来たのもニギリズシというのが、見た限りでは、炊いた飯に酢を混ぜ、一口サイズに握り、刺身を載せただけの簡単かつ単純な料理に思えたからだろう。

噂に聞くニギリズシを興味本位で作ってみた。そうしたらみんなが食べたいという。だから出しているといったところだ。

しかしそのため、余所の店でニギリズシと称して出されるのは、見様見真似^{みようみまね}どころか、噂話から推測して形だけ真似てみたときか思えないものばかりであった。

サイズが握りみたいにかいとかが、酢で飯をびしゃびしゃにして無闇に酸っぱくしたものであったりした。

もちろん、真面目な料理人が自分なりに美味しくなるよう工夫したものもある。

しかし、まだまだ形を追うことに精一杯で、味覚の分解能が「凄く美味しい」「美味しい」「マズい」の三段階しかないシユラですら、眉を顰^{ひそ}めてしまうほどであった。

だが、それでも多くの人々がそういった店に足を運んだ。そして生まれて初めてニギリズシを食べた客は、そこで食べたものをニギリズシだと思ひ込む。そのため「美味しい」という噂は聞くけど、実際に食べてみたら酷いものだった」という評判まで流れるようになってしまった。

シユラとオデットはそのことにとても強く憤慨していた。

実際の握り寿司は、酢の利かせ加減、飯の握り具合、ネタとシヤリの大きさや質量比など高度に計算された奥深い料理だ。真似するなどは言わないが、真似するならせめて一度は本物を食してそれに近づく努力くらいしろと二人は主張している。

すると江田島は軽く嘆息してシユラの肩を叩いた。

「違います。私が聞きたかったのは、そっちの様子ではありません」

本来の目的を忘れてくれるかと告げると、シユラは笑いながら言った。

「ああ、兵隊達の件だね。街はとても警戒が厳重だったよ。そこかしこに見張りが立って、プリムに似た女は片っ端から調べられてるんだ」

「プリムが、ミスール号まで辿り着くのは無理そうなのだ」

シユラとオデットは、買い物にかこつけて偵察してきた街の状況を報告した。

プリメーラを女王に推戴してアヴィオン王国の再興を企てていた女王レディ。ところが、捕らえていたはずのプリメーラが、徳島達の策略によって奪い返されてしまった。成り行きとはいえアヴィオンの宰相、更にはアトランティアの宰相をも兼務している石原は、間近に迫った戴冠式をプリメーラの偽物を立てて乗り切ろうと画策していた。

そうだった以上、石原としてはもはや本物は目障りである。だから徳島達にも、早くアトランティアからプリメーラを追い出せと囁（ささ）かっていた。

だが、女王レディは本物を絶対に逃がすつもりがないらしく、徹底的な搜索を命令したのである。明らかに別人であるシユラやオデットすら誰（たれ）かされ、手荷物検査を受けたという。

おかげで徳島達もこの妓楼船で足止めを食らっていた。目的を果たすまでの仮拠点でしかなかったこの場所に居続けなければならなかったのだ。

「問題は、あんまりここに長く居座つてると……」

江田島が声（こゑ）を潜（ひそ）める。

するとシユラも皆まで言うなとばかりに頷いた。

「分かっているさ。早くここから逃げ出さないと」

プリメーラをこの妓楼に隠そうと提案したのはシユラ達だ。

もちろん、それは追跡から逃れるための一時凌ぎの嘘、木を隠すなら森の中、女性隠すなら妓楼へという計略で、その時はよい思い付きだと思っただけだ。

しかし追及を逃れるためとはいえ高級娼婦を名乗ったがため、プリメーラは客を取らねばならなくなっただけだ。大切なことなのでもう一度言うとして、「プリメーラは娼婦としてお客を取らねばならなくなった」のである。

その時、ヒュメ種のプーレが欠伸（あくび）をしつつ厨房に入ってきた。

アトランティアの王城でプリメーラ付きの唯一のメイドだった彼女は、プリメーラの人柄に惹かれて脱出に協力、この妓楼船にも付いてきている。そして最高級娼女（ざじょ）には付き人として娼婦見習い

が付くため、その役目を買って出ていた。

「みなさん、おはようございます」

「あ、おはようなのだ」

新参者となるメイドに皆が注目する。

「プーレ。彼女はもうしてる？」

徳島はプーレの顔を見るなり尋ねた。

「あ、トクシマ様、おはようございます。姫様はまだご就寝中ですよ。昨夜は遅かったのでお目覚めは遅くなると思います」

最悪の事態を想像してしまったのだろう、シュラが心配そうに問いかけた。

「昨夜は遅かったって……ま、まさか、お客と同衾した訳じゃ……」
するとプーレは胸を張って答えた。

「まさか！ プリメーラ様は、このメトセラ号の三美姫の一人ですよ。そう易々と客に肌を許す訳ありません」

不幸中の幸いは、このメトセラ号がお高くとまった格式の高い妓楼だということだ。

最高級娼姫ともなれば、千金を積まれたってほいほい肌を許しはしない。

そもそも高級妓楼とは客が娼姫の時間を買ひ、口説くことを許されているに過ぎない。「娼姫がその客を気に入ったら」同衾が許されるだけなのだ。

もし手っ取り早く、すぐに欲求を満たしたければそういう店に行け、という何とも高飛車な態度である。しかし、それがよいという客がやってくるのがこの高級妓楼メトセラなのだ。

「それに……」

プーレは言葉を続けた。

「それに？」

「娼姫モードになった姫様は最強です。礼儀を知らない男には冷たい蔑むような視線と、高貴な男爵が雨あられと浴びせられています。今ではそれがよい、たまらない、罵られたという男が列をなして順番待ちしているくらいです」

今や二回目の予約を取ることさえ大変な状況で、プリメーラは次々とやってくる初顔合わせのお客と差しつ差されつ料理を楽しみながら、罵ってさえいれればよいのである。

「昨晚の就寝が遅くなったのも、そういう大変な野郎が罵られたがって、いつまでもダラダラ居座っていたからです。あたしが蹴りを入れて追い返してやりましたけど……」

「いやいや、いくら何でもお客にやっていいことじゃないのだ！」

オデットが安堵の苦笑をしながら冷静な突っ込みを入れた。

「それ、確実に人気の一因になってるよ」

シュラも呆れ顔で言った。

お客達はプーレをプリメーラの付属品と見る。そのためプーレに蹴っ飛ばされることも、お客が

心待ちにするサービスとなってしまうているのだ。

とはいえなれどさておいて。プリメーラの身の安全に責任を感じている徳島は、今のところ無事に乗り切れていると知ると、ホッと胸を撫で下ろしプーレの手を握った。

「ありがとう、プーレ。これからも彼女のことを頼むよ」

「あ、いや、その、あたしは何にもしてませんし……」

するとプーレは耳朶を真っ赤にして恥ずかしそうに顔を俯かせる。実にチョロい子である。

「でも、格式を理由に客を拒めるのは今だけだろう？ いざとなったら君だけが頼りだから」

もし頻繁に通い詰める客がいれば、いよいよ娼姫としての役目を果たさねばならなくなる時が来る。そうなったら——もちろんそうなる前に、このアトランティアから脱出してしまわなければならないが、それとてどうなるか分からない現状だ——出来る限り引き延ばす努力をプーレに頼むしかない。

「任せてください！ いざとなったらあたしが姫様の身代わりになりますから！ なあに、灯を落としてから褥しよねに入る瞬間、素早く入れ替われればバレやしません！」

プリメーラの腹心を自認するメイドは、主のために自らを犠牲にする覚悟がどれほどなのか、薄い胸を張りながら言い放った。

「いや、そんなことしたら普通にバレるよ（のだ）」

しかし張れば張るほど薄さが強調されてしまう小柄なメイドの胸を見ながら、シュラとオデット

はさすがに無理だろうと声を揃えて突っ込みを入れたのだった。

「……」

そんな話をしている中、蒼髪の少女メイベル・フォーンが挨拶もなく厨房に入ってきた。いや、どちらかという気付かれないように気配を消して忍び込んできたと表現すべきかもしれない。

だがそんな彼女の姿を徳島が目敏く見付けて声を掛けた。

「やあ、メイベル」

するとメイベルは大いに狼狽えた。

悪戯をしているところを咎められた子供がごとく、「びくつ」と身を弾かせ、冷や汗を流しつつ

「や、やあ」と挨拶を返したのである。

「どうしたんだい？」

疚やましいことでもあるのか、徳島と視線を合わせようとしない。そして徳島の問いを聞き流すように担当する仕事を始めた。

彼女の仕事は食器の支度だ。皿は客の格に合わせなければならないから、どれでもよいという訳ではない。いちいち確認しながらになるので、それなりに手間が掛かるのだ。

「な、何でもない。ハ、ハジメのほうこそ、作業の手を止めては朝食に間に合わぬぞ」

徳島はしばらくメイベルを見ていたが、小さく嘆息してすぐに寿司を握る作業へと戻った。

するとメイベルも幾ばくかホツとした表情となった。まるで苦行から解放されたような態度で、そんなメイベルが気になった江田島は徳島に囁いた。

「彼女、どうしたんです？　このところ振る舞いがおかしいのが気になりますねえ？」

「僕も気にはしているんです。けど難しい年頃ですから」

ロウリー・マーキュリーから聞いた話では、亜神とは亜神にしんこう陞した時の姿で身体的な成長が止まる。だから、ほとんどの亜神が見た目以上に老成している。ロウリーなどは見た目十代前半なのに、実年齢はよむい齡九百を超えているという。

しかしメイベルは、最近ヒトから陞したばかりだ。

最近といっても既に四、五年は経過しているが、それでも他の亜神と比べれば誤差の範囲。つまりほぼ見た目通りの中身なのだ。となれば、思春期真っ盛りということになる。情緒がなかなか定まらない年頃である。

すると江田島も頷いた。

「私も徳島君の意見に同意いたします。あの年頃は難しいですからねえ。突き放すのでもなく、かといって過度に関わることもなく様子を見ているのがよいでしょう」

するとその時、シュラがすれ違いざまに言った。

「メイベルなら、周りの娼姫からいろいろと人知恵をされて影響を受けてるみたいだよ」

メイベルは、このところ妓楼船メトセラ号の最上位に君臨する三美姫の一人、三つ目美女のセス

ラと仲が良い。彼女の部屋に招かれては、仲良く話をしている姿が目撃されているとシュラは語っていた。彼女の部屋に泊まり込むことさえある。

続いてオデットがやってきて、スツと徳島の腕に自分の腕を絡めた。

そしてメイベルのことをじっと見つめる。するとメイベルもオデットの視線に気付いたのか手を休めてこちらに視線を向けた。

「な、何？」

「いや……何でもないのだ」

オデットが目を逸らすと、メイベルは肩を疎めて仕事に戻った。

「やっぱりおかしいのだ……」

以前のメイベルなら、徳島とオデットが密着していたらすぐにやってきて間に割り込もうとしただろう。しかし今のメイベルはオデットのことを訝しげに見ているだけだった。徳島に対する気持ちなどすっかり冷めてしまったかのようなのだ。

けれど、とシュラは言う。

「それはオディにとつてはいいことなんじゃないの？」

オデットが徳島を攻略するにはメイベルは邪魔な存在だったから、徳島争奪戦から離脱してくれるならありがたい話のはずだ。

「それはそうだけど……」

堂々と競い合って相手を蹴落としたのなら、オデットも勝利の余韻に浸ることが出来る。しかし何やら訳の分からない事情で勝手に離脱されたのでは納得しきれない気持ちになるのだ。

そんな風に思ってたオデットが唇を尖らせていたその時、舷窓の外から何かが海に落ちる音がした。音の具合からして、かなり大きなものが落ちたようだ。

「ん、何じやる？」

メイベルが呟く。そして様子を見に行くと言って、手を拭きながら厨房から出て行ってしまった。そんなメイベルを見ながらオデットは呟いた。

「気持ちが悪くしてしまったように見せることで、ハジメの焦りを誘おうという高等なテクニクなのかもしれないのだ」

以前、そうした恋の手練手管を娼婦達が教えてくれたとオデットはシュラに語った。

「実際、ハジメはメイベルを気にしているのだ……」

「そう？」

「そうなのだ」

「そうかな？」

「なのだ」

オデットは、メイベルが出て行った戸口にいつまでも心配そうな視線を送っている徳島を見て、気持ちがざわめくを感じて小さく嘆息したのであった。

*

*

「そこのお前！ 大丈夫か？」

カシユは立ち泳ぎしながら途方に暮れていた。

彼が落ちたのは、喫水の深い船ばかりが並んでいる船区。手を伸ばして届くようなところに船縁はなく、二階建て建物の外壁のような高い乾舷に取り囲まれている。何の道具もなしに登るのは不可能であった。

しかも、そのままではいるのも危険である。

風に煽られ波に押された船同士が音を立てて衝突し、時には引き剥がされて船と船とを繋ぐ鎖が軋むような金属音を上げていくからだ。

もちろん、船体が激突の衝撃で破壊されてしまわないよう、舷と舷の間には緩衝材が挟み込まれているが、それすら押し潰すような大波が来ることもある。特にここ数日は、遠くで嵐が起きているらしくうねりが大きい。そんな時に船の隙間にいたら、人間なんぞ簡単にぺしゃんこだ。

「早く上がったほうがよいぞ！」

舷の上方から投げかけられた声は、カシユにとっては救いの声であった。

「もたもたしないで早く上がって参れ！」

命令口調だが、声の主は若い女性のよう。見上げると、船縁から蒼髪の幼い顔が見える。どう見てもカシユより若い。

少女はただ声を掛けるだけではなく、海面まで届く長い縄梯子を下ろしてくれた。

カシユは大急ぎで縄梯子まで泳ぐと海から上がった。

「ありがとう。助かったよ」

全身ずぶ濡れのカシユから滴る水滴が、木製の甲板に水溜まりを広げていった。

「一体どうしたんじゃ？ 朝っぱらから海に落ちるなんて、酒にでも酔っ払っておったのか？」

「違うよ」

「じゃあ一体何があった？」

「……」

カシユは口をぎゅつと結んで事情を語らなかった。

このアトランティア・ウルースでは、カシユが体験したようなことを他人に話しても、誰も可哀想とは思ってくれないからだ。被害者であることの主張は、特殊詐欺の実行犯がやりとりしているカモ・リストに自ら名前を書き込むようなもので、周囲は優しい同情顔を向けたとしても内心では間抜けと嘲笑する。だから苦境に陥った時ほど、つまり水に落ちた時ほど強がって胸を張らなければならぬのだ。

「分かった。ならば事情を問うのはやめる。けれど躬^みに助けられたということは忘れるではないぞ。

躬が縄梯子を下ろしてやらねば、お前は未だに海に浮かんでいたのじゃ」

「うん、それは分かっている。もちろんお礼も言うよ。ありがとう」

「言葉だけでは不十分だな」

「僕は何をすればいいんだい？」

蒼髪の娘は海水の滴るカシユの足の爪先から頭のとっぺんまでをジロジロと見つづつ言った。

「まずはその格好から何とかせねばな」

「大丈夫だよ。すぐに乾くし」

「いや、今日は風が強い。いくら日差しが強くとも、濡れたままでしたら風邪を引いてしまうはずじゃ。こちらに参るがよい」

蒼髪の娘はカシユの腕を引くと、船の前部甲板の開口部へと誘った。そしてその開口部から梯子段を下り始める。

「ここはどここの船だい？ 船長の許可なく勝手に入って見つかったら叱られない？」

カシユも娘の後に続いたが、見ず知らずの船に立ち入るのに抵抗を覚えるようで、周囲をきよるきよるきよるにしながら声量を落とした。

「大丈夫じゃ。この船の者はほとんどが眠っておるからな」

「もう朝だつていうのかい？」

「ここは妓楼船じゃからなあ」

カシユの言葉に覆い被せるように放たれた「妓楼船」という単語が、カシユの口を塞ぐ。

妓楼——その単語の響きは少年から青年へとなっていく成熟半ばの若者には、かなり刺激的なものだ。

こは、春を囂ぐ女性がいる場所。今、自分の目の前にいる蒼髪の少女も、金銭を対価に、男に肌を許している。昨日も一昨日も誰かに抱かれていたのだ。

「え、あ、じゃあ、君も、その、娼姫……なのかい？」

「そう見えるかや？」

蒼髪の娘は軽く肩を上げ、背筋から腰にかけて美しい曲線を作ると、艶っぽい瞳でカシユを見据えた。

その仕草はなかなか堂に入っていてゾクツとした。自らの中でオスの欲望がどろろを巻いて湧き上がるのを感じたカシユは、思わず目を背けてしまった。

「あ、いや、その、あの……わ、分からないよ」

「くすくす、お前は女を知らぬようじゃな？」

カシユは自分が弄ばれていると感じた。相手が目下だと思っただけに、心にあつた余裕もたちまち萎んで不貞腐れた気分になった。

「ど、どうせ僕は、君のようなベテランじゃないから！」

「どうも誤解があるようじゃな。確かにこは妓楼船じゃが、躬は自分のことまで娼姫だと紹介し

た訳ではないぞ」

「じゃあ、君は一体何なんだよ」

「躬はここでは給仕や雑用の役目を任されておるのじゃ。給仕という仕事を知っておろう？ 食事や酒を客室へと運ぶのが仕事じゃ」

「も、もちろんそれくらいは知ってるさ」

「ならば話が早い。客と共に寝てあれやこれやするのは躬の役目ではないのじゃ。もちろんこの美貌故、楼主からいずれは娼姫にならぬかと誘われてはおるがな」

まだ娼姫ではない。その言葉を聞いたカシユは、何故かどうしてか安堵の溜息を吐いた。

「へ、へえ……」

だが同時に自分の心臓がバクバクと音を立てていることを自覚した。どうもこの話題はカシユには負担が大きいらしい。

「おっ、着いたぞ。ここじゃ」

いつの間にか目的地に辿り着いていた。

蒼髪の娘は、扉を潜って小さな船倉に入ると、隔壁際に置かれた鞆を開け、ごそごと中身の物色を始めた。

小さな舷窓から入ってくる光に照らされたその場所は、古い箆笥や鏡が保管されている場所のようだ。そんな倉庫をこの娘は私物の保管場所に行っているらしい。

気が付くと、目玉が勝手に蒼髪の娘の腕や足、衣類の盛り上がりや滑らかな曲線、そしてその隙間からチラチラと見える肌色を盗み見ている。やめなきゃダメだと思っているのに、何故か目玉が、意思でも持っているかのようにそれらを追ってしまう。

次第にカシユの中に、誰もいない密閉空間に女性と二人つきりという、途轍もない気まずさが湧き上がってきた。

「おおっ、あったあった」

だが娘はそんなことに気付きもせず、荷物から布を取り出す。そして振り返るとカシユに放り投げた。

「これって環綿織？」

カシユはその柔らかな感触を試すように触ったり撫でたりした。

環綿織の布は、異世界からの輸入品で、最近では碧海の周辺諸国でも流通している。だが需要に供給が追いつかず、高級品の扱いだ。海上生活者にとって吸水性のよい布の需要は、陸上生活者以上のため、人々は奪い合うように求めているのだ。

ずぶ濡れの肌からどんだん水っ気が吸い取られていくことにカシユは強く感動し、頭から身体の隅々にまでわりついた海水をゴシゴシと拭いていった。

「よくこんな高級品を持つてるね」

「躬が前にいたところで手に入れた」

「ふーん」

「そう言えば、お前、名を聞いてなかったな……名は何と言う？」

「僕はカシユ・ノ・フランジェリコ。アトランテア海軍近衛艦隊所属、イザベッラ号の見習い士官さ。君は？」

「躬のことは、そうじゃな。カーレアと呼ぶがよい」

「か、カーレア!? ……いい、いい、名前だね」

すると蒼髪の娘は、カシユの顔を覗き込むようにして言った。

「ホントにそう思っているのかや？」

「いや、ごめん。ちょっと怖いなと思っちゃった」

神が実在するこの世界では、神にちなんだ名を子供に付ける親が稀にいる。

もちろん、そのまんまではさすがに畏れ多いので、少しばかり改変するのが常識だ。例えば美の女神ホロディにちなんだ場合はホロウ、勇気の神バジャンにちなんだ時はバジャールなどなど。つまりカーレアとは、堕神カーリーにちなんだ名前ということになる。

だが、カーリーは『絶望』と『嫉怨^{ルサチン}羨恨』……つまり『嫉妬』『恨み』といった負の情緒、人間の魂を腐らせる闇を主宰する神だ。神々との戦いに敗れ、地上に堕とされてから全てを激しく憎み、恨み、栄える者を引きずり下ろし、破壊と終焉に導こうとする。従って、その名を我が娘の名に付けるのは、日本人の感覚では、悪魔とか鬼といった文字を使うのに似ているのだ。